

Title	もう一人のソシュール(I) : ソシュールの『アナグラム』について
Sub Title	An another Saussure : On the Anagrams of Saussure
Author	小松, 英輔(Komatsu, Eisuke)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1979
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.38, (1979. 2) ,p.87- 102
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00380001-0087

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

もう一人のソシユール（I）

——ソシユールの『アナグラム』について——

小 松 英 輔

ソシユール死後五十八年目に於て、初めて公表された自筆論文原稿『アナグラム』研究の諸断片を解説紹介するに當つて、ジュネーブ大学教授J・スタロパンスキーは、この大言語学者はジュネーブ大学で有名な一般言語学の講義をするとは同じ時期に、自己の言語学についてはかり知れない懷疑主義に陥り、それと同時に、後世にその名声を損うものとして箱に收められ隔離されるにいたつたこの未公開原稿こそ、もう一人のソシユールを、いや本当のソシユールの顔と思想を垣間見せてくれる、と暗黙のうちに主張しているように私には思われる。次に引用するノートの切れ端は、『講義』⁽³⁾における体系論的科學たる構造主義の創始者とは違つた、言語の多元的現象を前に當惑するもう一人のソシユールの顔を見ることが出来る。

⋈……自分はペンを執るのも病的に恐い。そしてこの執筆が仕事の重要性に比して、全く不釣合な想像を絶する苦しみを私に与えてくれると貴方に告白せざるを得ないのですが、もしそうでなかつたとしたら、全く御解りにならなかつたでしょう。

こと言語学に関して言えば、すべての明白な理論は、それが明白であればあるほど、言語学では表現しがたいという事実からして、私にとってその苦しみは寡るのです。と申しますのは、この科學の中には、明白な觀念に裏づけられている何らかの用語一

つなく、そういうわけで最初の文と最後の文の間で、五回も六回も書き直しているようなわけで……⁽⁴⁾

ソシュールにとって、かつてパリ大学高等研究院時代の教え子だった、アントワヌ・メイエが最大の相談相手だった。次に引用する手紙は、相反する観念を巧みに統合する独特の思想を持ち合せたソシュールが古典詩研究の道すがら見出し出した疑問に対する自己の無力さの告白である。雄渾で断言的な口調に見える『講義』のソシュールと同時期に書かれた、メイエ宛の個人的書簡であることに興味を引かれる。

△

親愛なる友よ

ジュネーヴ

〔一九〇六年十一月十二日

他の研究の合い間に、サトゥルヌス詩研究の過程で私が書きとめておいた、ホメロス詩におけるアナグラムのノートを友人として読んで頂けると有難いのです。そして、この研究について貴方に心から相談申し上げたいのですが、そのわけは、そういうことに頭をつっこんでいる者にとって、その人が幻想のとりこになつていてのではないか、或いは何か真実が彼の観念の底にあるのか、はたまた半ばだけ真実があるのかほとんど解らないからです。⁽⁵⁾

同じ年の七月十四日、宛名不明(恐らくメイエ宛だと思われる)の手紙では、このアナグラムの問題が、頭韻法イソメトリックによる一定の音素の繰り返し繰り返しのより一般的な法則であることを発見した喜びを伝えている。詩のテクストの生成が、一定の子音と母音の組合せによる詩人の意識的な、或いは無意識的な操作による計数化(calculation)にあることをつきとめた重要な意味をもっている。

拜啓 先日差し上げた手紙の事柄につきあなたの御返事を頂き、有難うございました。あなたの誠に正当なる御意見に御答えずる前に、私は今やすべてのページにわたって勝利をおさめたと貴方に御伝え出来ると思っております。私は二ヶ月間にわたって怪物と戦い、まさに手探りでそれを料理したのですが、この三日間というものは、私は大砲の援軍を得て行進しているようなものです。私が長短々格の韻律について（と申しますかむしろ長々格の韻律について）申し上げたことは今なお有効ではありますが、私が今度サトウルヌス詩の鍵を握るに至ったのはまさに頭韻法によるもので、これがまた人が考える以上にやっかいなものなのです。

人々がサトウルヌス詩において認めていた頭韻法の（そしてまた脚韻法の）すべての現象は、より一般的な現象というよりむしろ、全く総合的な現象の取るに足らない一部分にすぎません。各々のサトウルヌス詩のシラブルの全体は、最初のシラブルから最後のシラブルまで、頭韻法の法則に従っています。ただ一つの子音も、——更にただ一つの母音も——またそれ以上に母音の音量一つとっても、注意深く積算されていらないことはありません。結果は斯くの如く驚くべきもので、これらの詩の作者たちが（……）どのようにしてこのような難問に取り組む時間を持ちえたかと、自問してみたくなる程です。何故なら、韻律法に関するものをすべてを除外したとしても、サトウルヌス詩とはまさに中国流チェスにあたるからです。……

以上の簡単な記述から、大学で一般言語学を受け持っていた時期と相前後する頃のソシュールの関心がどこにあったか推察出来る。言語学の研究が最終的に言語の自律的な一般法則の探究に向うとしても、それ以上にソシュールが重んじていたのは、幾つかの言語の具体的事実の記述であり、あらかじめ立てられた仮説の説明であったり、ヨーロッパの理性の他民族への照射であってはならないと考える。ソシュールはそのことを、言語学の一般的方法を論じた序論(Introduction)の第二章の最初で述べている。この部分が『アングラム』研究と『講義』とを、方法的に、また思想的に結びつける唯一の個所だと言えはいいえる。言語学の素材となるべきものは、すべての民族、時代、言語表現様式(日常言語だけでなく、詩的言語も含めて)の客観的分析にあると述べている。

《言語学の資料をなすものは、まず人類言語のすべての現われである、それが未開民族のものであらうと、文明国民のものであらうと、上代、古典ないし退廃時代のものであらうと、その各時代においては、ただに正しいことばづかい、「美しいことばづかい」のみならず、ありとあらゆる形式の表現を考慮に入れるのだ。》⁽⁶⁾

デイスクールとは何か

スタロパンスキーの提出する資料を丹念に読解すれば、それは『講義』の欠落部分を補ってくれるにちがいない。問題の『アナグラム』研究の納められたすぐ前の分類箱の資料 (Ms. fr. 3961) で、ソシヤールは

langue vs discours

の考察をしている。これは『講義』の中に見られる有名な二分法、

langue vs parole

と対比されるものであるが、ラングが人間の下意识 (subconscient) の中に埋め込まれた言語機能であり、パロールが個人のそれぞれの機会における一回限りの「意志と知性による言語行為」であるとすれば、この二つの二分法は同じ内容のものであらうか。次の引用はよく検討すると、事はそれほど簡単でないと言っているようである。

《ラングはデイスクールの目的にして作られたものにすぎないが、デイスクールとラングを分つものは何だろうか？ というか、これこれの時に、ラングがデイスクールとして行為化されると言わしめるものは何だろうか？

ラングの中には、例えば、beuf (牛)・jac (湖)・ciel (空)・rouge (赤)・triste (悲)・cinq (五)・fendre (ひびを入れる)・voir (見る) のように、様々な概念概念が準備されて(つまり言語的形態をよそおって)そこにある。「ところで」いかなる時に

或いはいかなる操^{オペレーション}作^{ワザ}で、それらの語の間に打ち立てられるいかなる働き^(act)で、いかなる条件のもとにこれらの概念はディスクールを形ちづくるのであろうか？

これらの語の列なり^(series)は、それが喚起する諸観念がどんなに豊かであろうと、ある一人の人間個人に対して他の人間個人がそれらの語を口にして、彼に何事かを意味しようとするということを指し示すのでは決してないであろう。ラングの中で自由に使用されうる名辞を用いて、われわれが何事かを意味しようとする観念を持つためには、どうしたらよいのだろうか？ それはディスクールとは何かを知ると同じ問であり、一見したところ答は簡単である。即ちディスクールはそれが例え初歩的なものであっても、またわれわれの知らない手段によるものであっても、言語的形態をまとして提出された二つの概念の間に一つの関係を断定することであり、それに対してラングは前もって孤立した概念を実現するだけであり、この概念は思考の意味作用が存在するために、それぞれの間で関係づけられるべく待受けているのである。《〔傍点ソシユール〕(Ms. It. 3961)

この曲折した合意性の多い記述の中で、われわれは常識的なソシユール理解の範囲を越える必要がある。ソシユールはまず視点を『講義』とは反対に、ラングの言語学ではなく、パロール(言活動) 或いはディスクールの言語学に向けているのである。ソシユールによれば、「単なる」語の列なりは、語り手が相手に何かを意味しようとする^(vouloir signifier)ことを指し示すのではない。意味作用^(signification)には、常識的な意味で《記号表現》と《記号内容》が一对一で対応するのではなくて、彼の表現に従えば、「語と語の間に打ち立てられる働き(戯れ)」のことで、言葉をかえていえば、言語活動を成り立たせているのは、記号と他の記号との間にある差異の關係ばかりではなく、記号と記号の結合方法の差異が《point》となるのである。

ソシユールは記号と他の記号の間にある差異は、ラングの体系に属すると考えていた。それは人間の下意识下に置かれた語の選択性のことであり、パロール或いはディスクールに属する言語の個人的・創造的な使用価値は、記号と記号の隣接性、つまり結合法の戯れ^{プレイ}の中にあると考えた。

ソシユールの言わんとすることは、単なる語と語の列なりがデイスクールを形成するのでないなら、それらがいかなる時に、いかなる操作で、それらの語が「*work*」(働き、戯れ、遊戯)として置かれるのか、その条件を理解することがデイスクールの分析の大切な要件となるのだというのである。そしてこれが他ならぬ、これから分析されるであろうソシユールの『アナグラム』研究の命題となるところのものである。

以上の意味で、デイスクールはパロールと異なり、それ自体のうちに生成機構を含み、語り手の明証的な意識とは関係なく肥大して行く、不透明な厚みを持った言説だと一先ず言っておこう。『アナグラム』研究においては、テキストは生産性(productive)として捉えられ、その中に主体が含まれるとすれば、その主体は決して一義的にデイスクールの表面に現われるものではなく、常に裁かれ、検証される必要のある主体である。テキストが生成される以上、そこに仮定される何らかの意味での語る主体は、作者(ラテン語の *author* 保証するもの)としての主体の、一度死んでテキストの中に再び不在として甦^{よみが}えるもので、音素の一粒一粒の中に欲望の表現として現われる、分割された(或る意味で打ち砕かれた)主体である。生きた作者(實在の)はパロールによって保証されうるかも知れないが、語るという行為が日常の人間の行為から離れてテキストの中に言語の生産者(*producteur du langage*)として甦^{よみが}える語り手を支えるのはデイスクールである。⁽⁷⁾

記号の価値理論

先程の引用とは順序が前後するが、その手前に隣接する断章で (*Ms. fr. 3958/4*)、ソシユールは『講義』の中で理論的に述べられた「記号の価値」説について、特に記号が実際の流通過程で、どのようにしてその価値を変更して行くかについて注意をうながしている。

そもそもソシユールの言う「言語的価値」とは、A という「記号表現」(音声記号)と A' という「記号内容」(概念)の関係が本来の⁽⁸⁾に含む意味関係のずれを仮定しているのであり、更に記号そのもの (A+A') でさえ、他の記号との相関的關係の中で、その示差的価

値に根拠を置いておられることである。[★]

言葉をかえていけば、一つ一つの記号はそれ自体の中でも、また他の記号との関係の中でも、絶対的、一義的な意味を持つものではなく、記号は言語内関係の網の目の中に位置づけて見なければ、その価値を把握出来ないと云っているのである。

例えば、ソシュールの挙げるたとえによると、五フラン貨の価値とは、

(1) 金銭とは性質のちがう他の物、例えば一定量のパンと交換できること

(2) 同じ金銭の体系でも、五フラン硬貨は一フラン硬貨五枚と交換出来るし、またそれに相当する銀行小切手にも、或いはドルにも交換出来ること、

であり、『同様に、語は性質を異にするもの、すなわち観念と交換されるし、その上、同じ性質のもの、即ち他の語とも比較されるのである。』しかしこの一種の交換価値ともいえるものは、実際の流通過程における使用価値においては、同じ交換比率を持たないのである。』したがって、語の価値というものは、それがかくかくの概念と交換される、つまりかくかくの意義をもっているということだけを見ている間は、決定されない。それに加えて、同じような価値と、「いいかえれば」その語に對置される他のいくつかの語と、比較してみなければならぬのである。』⁽⁹⁾

言語記号がその記号の能レシニフアンクシオン 記と所シニフアンクシオン 記との間でさへ同一性 (identie) をもたず、またそれが他の記号の中に置かれると「価値」を變えるという、『講義』の中であげられた理論の興味深い具体例が『未刊資料』の中に見られる。ここでシンボル (symbole) といわれているのは、体系組織を構成する最小の意味単位のこと、伝説「神話研究における意味素、言語研究における記号素シニフアンクシオン」にあたるであろう。Nebelungen 伝説の研究の一断章である。(Ms. fr. 3958/4)

⊕——伝説は一連のシンボルで——その意味は正確にされるべきだが——構成されている。

——これらのシンボルは、そうとは気づかずに、例えば言語の語 (mots) がそれにあたるシンボルのように、すべての他の一連のシンボルと同じ変遷と同じ法則とに従えられている。

——それらはすべてセミオロジ (記号学) の一部をなす。

——シンボルは固定していなければならないとか、それは無制限に変化しなければならないとかいったことを仮定するいかなる考え方もない。それは恐らく、ある幾つかの限定の中で変化すべきものであろう。

——記号の同一性は、それがシンボルとなった瞬間から、つまりそれぞれの瞬間にその価値を決める社会大衆の中に流布されるや否や、それは決して固定したものではなくなる。

かくして、ルーン文字〔古代北欧文字〕の Y が Δ シンボル ∇ としてあったとしよう。その「同一性」はあまりに明確であるとしても、それを更に確認するとなるとほとんど奇妙なことになる。そのわけはこうである。この文字の形態は Y である。この文字は Z と読まれる。この文字はアルファベッドの八番目に数えられる文字である。この文字は不思議にも Nam と呼ばれ、最後にこの文字は時々語の最初の文字として引用される。

しばらくするとこの文字はアルファベッドの十番目になり、だがここですでにそれが予想させるようになる一つの単位は……〔以下文中断される〕

ところで〔この記号の〕同一性はどこにあるのか？ 一般に人口は微笑んで、あたかもこのことが実際奇妙なことであるかのよう
に、この哲学的重要性には目をとどめずに答えるのだが、それはまさにすべてのシンボルは、一度流シムボル・ストリーム通の中に投げ込まれると
——とところであらゆるシンボルは、それが流通の中に投げ込まれるが故に、存在するにすぎないのだが——、次の瞬間どこにその同一
性があるのか即座に言いうる絶対的不可能性の中に置かれると言っても過言ではない。》〔傍点ソシユール〕

ソシユールは *Niebelungen* 伝説に関する同じ考察の中で更に続けて、伝説中のそれぞれの登場人物はシンボルであり、一國の神話

体系の中では機能として働くが、実際の語りの配列過程の中で、このシンボルとしての人物は、名前・他者との関係における位置（立場）・性格・機能・行為を変えて行くと言っている。あたかも物語の生成機構の中に埋め込まれた（言語学におけるラングのように）、機能としての固有名詞が、デイスカールとしてテキストの中に実現される過程で（言語学におけるパロールのように）、テキストが生成されて行くと言張しているようである。スタロバンスキーはこの部分の断片に解説をつけて、次のように言っている。

『歴史的事件とその伝説的置換の中にソシュールが仮定している関係は、彼が下位言語（或いはテーマ語）とその展開としての詩的テキストの間に仮定するであろう関係を予知するものだ。どちらの場合も、探究は産出的な心的機能（想像力）に向うのでなく、先行する（言葉・物語の）事実に向うのだから』（『言葉の下のことば』十七頁）

そして、スタロバンスキーが付け加えて言うように、

『それ故意味を生成物として考えなければいけないのだ——結合法の適用による可変的生成として——。そして、それを変化のないあらかじめ与えられた所与として考えてはいけけないのだ』（同上、二十頁）

伝説・神話がそれ以前に書かれた下位テキストの上に書かれた、一定の事件のグループ（un groupe défini d'événements 同上十七頁）の記号論的書き替えであるように、詩的テキストは一つの国語体系の中に含まれた一定の記号或いは記号グループの組み替えの差異から生れる新しい意味の生成である。

国語体系と同じく、伝説の貴さを生み出すのは、どちらもが自分の前にもたらされた要素と何らかの意味だけを用いるように強いられて、それらを寄せ集め、継続的にそこから新しい意味を引き出していくそのことにある。こういう伝説の概念を誤りだと結論する前に、よく考えて見るがよいだろうが、一つの重要な法則が大きな役割を演ずるのである。即ち惰性体としての諸要素の結合でなようなものが開花することは決してあり得ないし、また素材とは、思考が消化し配列し命ずるところの、またそれなくしてはすま

されないような継続的栄養物以外の何ものでもないということである。

伝説が一つの意味から出発し、最初からその持つ唯一の意味 (e sense) を保持していたと想像するか、それとも伝説は絶対にこれこれの意味を持ちえなかったと想像するかは、私の能力を超える操作である。伝説が事実上仮定出来るように思われるのは、意味は決して質料的要素によって、何世紀かにわたって、この伝説の上に伝達されるのではないということである。何故なら、五つないし六つの質料的要素が与えられ、もし私がそれを別々に仕事をしている五人ないし六人の人々に組合せをさせると、何分かの後には意味は変化してしまおうからである。》 (Ms. fr. 3959/10 同上十九頁—二〇頁)

ソシュールが企てた「一般言語学」の構想と並んで、今日最もその重要性が注目される「記号学」^(セミオティク) について、少なくとも次の短い考察を付け加える前に、いま一度ソシュール自身の言葉を引いておこう。

——それらのシンボル〔言語記号と並んで神話伝説における英雄的人物も含めて〕はすべて、記号学^(セミオティク)の一部分をなす。(Ms. fr. 3958/4) ソシュールがこれらの断章 (Ms. fr. 3958/14) で繰り返し強調するのは、記号としてのシンボル⁽¹⁰⁾が深層テクスト (géné-texte) の中で、どのように生成して行くかという問題である。伝説に含まれるシンボルが、言語記号のように、分節されるのではなく、言語を通じて、言語の中で、言語によって分節されるのだと言いたかったのである。事実今の引用の最後の部分で (Ms. fr. 3959/3) ソシュールが述べていることは、内容的に次のように説明することが出来る。即ち伝説がその起源に遡って、ただ一つだけの絶対的「意味」を持つかどうかは、重要な問題ではない。「意味」はもしそれがあったとしても、具体的な歴史上の事実 (élément matériel) によって後世に伝達されるものでもない。強いて言えば、意味体系の構造性が後世に伝達されるのだ、と言っているように理解できる。

ソシュールが『講義』で与えた「記号学」の定義とは別の意味⁽¹¹⁾で、ここに述べられている思想は次の意味で重要な価値を持つ。即ちテクストは「意味」(sens) の担い手ではなく、「意味形式性」(signifiance) の担い手であること。そしてこれから先は、ソシュール自身の理論を離れて、そして問題の『アナグラム』研究においては、ソシュールが今なおその宗主であるところの、今日的な意味で

の「記号論」の問題意識に合流するのである。(未完 一九七八年十月)

(注)

(1) 提出された資料は、次のテクストに見ることが出来る。刊行者はそれぞれ Jean Starobinski である。

《Les mots sous les mots》—Les anagrammes de Ferdinand de Saussure. Gallimard 1971.

《Les anagrammes de Ferdinand de Saussure》Mercure de France, fév. 1964.

《Les mots sous les mots》To honor Roman Jakobson. Mouton 1967.

《Le texte dans le texte》Tel Quel N° 37. 1969.

《Le nom caché》—L'analyse du langage théologique—Le nom de Dieu. Aubier 1969.

《La puissance d'Aphrodite et le mensonge des coulisses. Ferdinand de Saussure lecteur de Lucrece》Change N° 6 1970.

《Semiotope》—Saussure's Anagrams. Columbia University 1975.

(2) シェネーム大学における一般言語学の講義は、第一回一九〇七年、第二回一九〇八—一九〇九年、第三回一九一〇—一九一一年に行なわれた。今これから問題にする、『アナグラム』研究は一九〇六年から一九〇九年にわたると、スタロビンスキーは推定する。即ち一般言語学講義と全く重複する時期である。残されたノートは、ギリシヤ・ローマ詩その他に関するものが一五冊、ヴェーダ詩法に関するものが二六冊である。ソシニールはこれらの研究を刊行するつもりでいた。

(3) あまりに有名な事実であるにしても、もう一度確かめておきたいことは、『Cours de linguistique générale』なる書物は、ソシニール死後、同僚のバイイ、セシエヌ教授によって、生徒達のノートをもとに編纂されたものである。ソシニール自身この『講義』を刊行されることは不本意だった。(cf. メイエ宛書簡一八九四年一月四日付)

(4) Ms. fr. 3957/2 この手紙の草稿は、後になって一八九四年一月四日、アントワヌ・メイエ宛の手紙のものであることがわかった。

cf. Louis-Jean Calvet «Pour et contre Saussure» (1975 Payot) p. 48-49.

Robert Godel «Les sources manuscrites du cours de linguistique générale de F. de Saussure» (1957 Droz p. 31.)

ゴデルの『源泉資料』には、この手紙の方の大部分が引用され、一般言語学講義を始めるすこし前における、ソシュールの關心の動向をめぐって大きな關心を払われている。

G・ムーナンによれば、ソシュールは「一般言語学を扱うかわりに……良心の咎めを感じながら……ニーベルンゲンの詩といったような、部分的には言語学とは無関係な新しい主題に首をつっこんで行く。……ジュネーブの土地の名の語源、彼がアナグラムと呼ぶ、詩形における種の反覆の分析などで、彼の言葉を借りれば、楽しんでいたのである。」(『ソシュール』(福井芳男他訳、十五—十六頁)。ソシュールがアナグラム研究で決して楽しむどころではなかったことは、今の手紙の草稿を見ても、また次の本文に引用するメイエ宛の手紙でもわかる。ところで彼の研究の方向が言語の一般法則を樹立する方向にあつたか、各国語の具体的事実の探究に向う方向にあつたかは、手紙の内容から後者の方に断定できよう。次に引用する個所は、そのことを証明するだけでなく、すでにこの時代に構想されていたらしい、フランス語以外の國語の詩における、具体的・民族誌的な言語事実の探究を予告しているように思われる。

『結局のところ一つの言語の特徴的な浮き出た側面(原文を直訳すると「絵画的な側面」)、ある起源をもったある国民に属するものとしてこれを他のすべての言語と違うようにしている面、このほとんど民族誌学的な面だけが私には關心があるのです。』(ムーナン、同上十六—十七頁)

(5) メイエ宛書簡。ローマン・ヤコブソン『詩学の諸問題』(一九七三)所収。

(6) 『一般言語学講義』原著二十頁、小林英夫訳による

(7) ソシュールの理論をもつばら『講義』の読解から出発して、このような言行為(パロール)の創造的な側面を特に強調した人に、メルロー・ポンテーがいる。cf. Signes, Gallimard 1960 (I. Le langage in direct et les voix du silence. II. Sur la phénoménologie du langage.)

この問題意識を、パロールを言語の「交換価値」と見なし、ディスクールを言語の「使用価値」と見なすことによつて、ジャン・ジュゼフ・グウの最近の言語理論のマルクスの読み直しに当てはめるのも面白いだろう。彼によると西欧の歴史上、言語記号はそれが伝達または表現の相であるうと、或いは翻訳可能性という相であるうと、商品取引と同じ意味での記号の「交換価値」(la valeur d'échange des signes)と考えられて来た。それに対して記号の「使用価値」(la valeur d'u-

sage des signes) によって意味されるのは、それが直接的に消費の対象となるばかりではなく、それは他の生産の手段としても役に立つことで、すべての記号或いはその一部分は更に他の記号の生成の手段ともなるというのである。確にこの論法で行けば、ソシュールの『アナグラム』研究は「記号内容」の「記号表現」に対する「剰余価値」の研究であると言ってもいいであろう。マラルメもまた、日常言語は金銭と同じ「交換価値」しかもたないと述べている (cf. 『詩の危機』)

cf. Jean-Joseph Goux, Marx et l'inscription du travail, in Théorie d'ensemble (Tel Quel) 1968, Ed. du Seuil.

- (8) ソシュールは「秩序をことにする物のあいだの対当の体系」即ち「記号内容」と「記号表現」の関係を、当時の経済学を援用して労働と賃銀の価値関係に転用している。この二つの関係の間に本質的に décalage (ずれ) があり、ある場合は欠如 (absence) を、ある場合は剰余を生むのが経済学と同じく、言語学にも (特に詩的言語にとって) 本質的な問題であることが、本稿で後に明らかにされよう。(ソシュールの言及は『一般言語学講義』原著一一五頁参照)

- (9) 原著一六〇頁。翻訳は『ソシュール』ムーナン著、福井芳男他訳による。

- (10) ソシュールがここで混同している「記号」と「シンボル」の用語法を、『講義』の記述では訂正している。以下の引用に見られるように、シンボルは記号と異って、「記号表現」と「記号内容」の関係が恣意的でなく有縁的で、そのために関説物(指示対象)の持つイメージの物質性が、そのままシンボルに乗り移っている。これに対して(とソシュールは暗黙裏に言っている)、記号とは現実の指示対象から切り離された無である。私はこれに対して更に付け加えておきたいと思う。テクストの中に記号が生成するのは、イメージによるのではなく、この記号の放つ虚無性によるものだ。

『言語記号を、いっそう精密に言えば、われわれが能記とよぶものを示すために、象徴 (symbole) という語をひとは用いてきた。それを許すにはつごうのわるいことがある、まさにわれわれの第一原理のゆえである。象徴の特質は、恣意性に徹しきらないところにある。それはうつろではなくて、能記と所記とのあいだにわずかながらも自然的連結がある。法の象徴である天祥は、これを随意の他のもの、たとえば馬車などに代えることはできないであろう。』(原著一〇一頁、小林英夫訳)

- (11) 「記号学」と「記号論」の用語について、ことばの混乱を回避するために、次の注を付しておこう。「記号学」については、ソシュール自身次のごとくかなりよく定義を与えている。

『そうすると、我々は公社会生活内における記号の生を研究する一つの科学』を考えることができよう。この科学は、社会心

理学の一部門でもあり、したがって一般心理学に属することになろう。我々はこれを(記号学 *semiologie*) (ギリシャ語の *semeion* (記号) という語から) と呼ぶことにしよう。記号学は、記号が何からできていて、どんな法則に支配されているかというものを解明してくれるであろう。…言語学はこの一般科学の一部門に過ぎないのだから、記号学が解明するであろう法則は言語学に適用されるし、したがって言語学は人間の事象の総体の中ではっきりと規定された一分野に属することになるであろう。』(原著三十三頁、翻訳は福井芳男他による)

ソシュールがここで述べていることは、主として象徴的儀式、礼儀作法、軍隊の信号、パントマイム或いはモードのような言語外的 (*extra-linguistique*) 記号体系のことであり、言語学をもこの中に含む一般的記号科学である。これに対して、特にロラン・バルトの見解に従い、すべての人間の事象は必ず言語という中継手 (*relais*) を必要とするのであり、その意味で言語学こそすべての記号科学の上位に位置するものだとして、最近の「記号論」は目ざましい展開をとげた。それは端的に人間のデイスクールに目を向け、国語体系内部における (*intra-linguistique*) 記号自体の問題、特に「記号表現」と「記号内容」の関係そのものの問い直しに向っている。記号論的分析がテキストを始め、何らかの言述の分析を主とするのはこのためであり、またソシュール自身が予告したように、「記号論」は精神分析学 (ソシュールは心理学と言っているが) における主体の無意識と切っても切れない関係にある。(『記号論は意味作用の科学である』『記号論はデイスクールの科学として樹立されるだろう』J・クリステヴァ『セメイオティケ』八頁・十八頁)

★この記号の価値理論が、当時の経済理論ばかりでなく、自然科学の理論でもあった証拠として、スタロパンスキー教授は次のテキストをコロンビア大学の紀要 (『セミオテキスト』) に寄稿している。

『あなたの方の企てる「二人のソシュール」の対決が実りある成果を取めることを期待します。もし二人のソシュールがあるとすれば、それは従って明確にさるべき「差違」(*différence*) があるのです。そしてソシュールはわれわれに差違こそ生産的であることを教えてくれた最初の人なのです。

「テキスト」は私に「織物」(*tissu*) を、「亜麻布」(*toile*) の織物を連想させます。私は手元にジュネーブの自然科学者、シャルル・ボネ (Charles Bonnet) の未刊テキストを持っています。この人は物理学者であり地質学者でもあったオラーズ・ベネディクト・ド・ソシュール (Horace-Bénédict de Saussure) の伯父で、その意味でフェルディナン・ド・ソシュールの

曾祖父かなにかに当る人です。このテクストはクモの「巢」(toie)に関するもので、その巢^ニ織物の意味をあなた方の考察にゆだねます。

あなたには言われます——クモはハエを取るために巣を張るのだと。むしろこう言われた方がよいでしょう——クモは巣を張るが為にハエを取るのだと。クモはハエについての生得的な(innée)観念をもっているのでしょうか？ ハエが巣にかかるであらうということを知っているのでしょうか？ クモは自分の織り物と「ハエの」飛行関係を、ハエの筋力との関係を知っているのでしょうか？ クモはある欲求(desoin)を充すために巣を張るのであり、その欲求とは彼の内臓がとじ込めている絹質の物質を排泄することです。この欲求は多分快楽(plaisir)によって伴われています。即ちいたるところで、自然は快楽を欲求に結びつけているのです。織り物の形象(figure)と構造(structure)とは昆虫の身体組織(organisation)の必然的結果(résultats)です。その体は仕事を実行する織機(métier)です。だがその魂はこの織機の運動を感じるものであり、それらの運動に喜びを感じるのです。クモの身体機構をよく知っている知性なら、この機構の中に、クモの巣の放射と多角形の理性(raison)を見られるではありません。こうして糸を紡ぐという欲求を満足させながら、クモはそうとは知らずに自己の存続に必要なことをしているのです。》《semiotexte》No 2, 1974, p. 9, No 1, 1975, p. 5-6)

スタロパンスキー教授はこのテクストの末尾で、ボネが特に「欲求」・「快楽」・「形象」・「構造」の各語に傍点をふっていることに注意を喚起する。しかしこの譬えの意味は、テクストがクモの巣で、それを読む読者はハエに当るという簡単な比喻ではすまされない(とスタロパンスキー教授自身も言っている)。上記引用のテクストとは全く無関係に、ロラン・バルトもテクストについて全く同じ観念を抱いている。

『テクストとは織物という意味である。ところが今日まで人々はいつもこの織物を生産されたもの(produit)、出来上った布地として捉え、その背後に何らかの意味で隠された意味(真実)が保たれていると考えて来た。われわれはそれに対して今度は、織物の中に、永遠に続く組合せ模様を通じてテクストが生れ変型をこうむる、生成的観念を強調したい。この織物の中で——この仕組・構造——失なわれた主体は解体する。丁度自分の巣を作る分泌行為の中に、自らを分解させていくクモのように。ネオロジスムを用いたければ、われわれはテクストの理論を「hyphologie」(菌糸学)と定義出来よう(hyphosとは織

物、クモの巢の意味である)。(『テキストの快楽』原著一〇〇—一〇一頁)

シャルル・ボネとロラン・バルトの考えは次の点で完全に一致している。即ち、テキストは作品の思想を離れて、またそれ以上にテキストは作者が自己の思想や感情を表白する場ではなく、テキストの保証者^{オトクシ}としての主体は解体し、言語自体が分泌する物質によって、身体機構の欲望を表現するだけである。クモは自分の巢について「それが何であるかという」生得的な観念を持たない。その内臓から放射される絹質の織物の形と構造は、ただ排泄の欲求と快楽の結果にすぎない。従って、テキストとは書き手にとっても、読み手にとっても、それ自体が享楽の対象である。

『テキストは人間の形態を持ち、それは一つの形^{フォルム}象^{イメー}である。身体のアナグラムであらうか？ そうだ、だがそれはわれわれのエロチックな身体^{ボディ}のそれなのだ。テキストの快楽はその文法家的な機能作用には(現象テキスト的な)還元されえない。あたかも身体の快楽が生理学的欲求に還元されえないのと同じように。

テキストの快楽とは、自分の身体がそれ自身の考えに従って行くその瞬間のことである——何故なら、私の身体は私自身とは同じ考えを抱かないからだ』(『テキストの快楽』三〇頁)